



聖者の行進



阿門 遊

大きな川が流れている。だが、川には水がない。何が流れているかって？人間だ。いや、生きた人間じゃない。死んだ人間だ。それも、固体じゃない。液体でもない。気体でもない。そう、霊体だ。（そんなものあったのか）それに一人（ひとつ？）ではない。何十人、いや何百人、何千人、何万人もの人間の霊が流れている。いや、流れているのではなく、歩いて行進している。知らなかった。死んだ人間、霊にも足があったのだ。

霊たちは、山を越え、谷や川を渡り、街を通り過ぎようとしている。だが、生きた人間の眼には見えない。一人、また、一人、大河に流れ込む小川のように、できたてのほやほやの霊たちが、隊列の中に加わる。みんな、口をパクパクしている。何かしゃべっているのか。

よく見ると、みんなの上唇と下唇は同じ動きだ。口を大きく開けたり、すぼめたり、尖らしたり、横に広げたり、口角を上げたり、とても忙しそうだ。拍手をしている者もいる。足踏みをしている者もいる。中には、楽器を持って演奏している者もいる。そうだ。みんな、歌っているんだ。何を？何の歌を？

「御臨終です」

医師が振り返った。ベッドの上には、老婆が横たわっていた。そのベッドを取り囲むようにして、中年や若い男女たちがいた。中には、生まれたばかりの赤ちゃんも抱き抱えている若い母親もいる。「うううう」声を押し殺して泣く者もいる。ただ、黙って俯く者もいる。手を合わせ合掌する者もいる。病室から外に静かに出る者もいた。家族にとっては特別の出来ごとだが、病院にとっては毎日起こっている風景だ。

老婆から思いが抜けていく。その思いは、病室を抜け、病院を出て、道路に出て行った。そこには、これまで同じように生を受けていた者たちが行進していた。老婆の思いは、一粒の水滴のように、人の川に流れ込んでいった。また、一人分、川が大きくなった。

「あんた、今、死んだのかい？」

行進に入ってきた老婆に、すぐ後ろの老婆が尋ねる

「ええ、そうです。わかりますか？」

「そりゃあ、わかるよ。あんた、まだ、あったかいもの」

老婆は自分の体を触る。手は温もりを感じずに体を通りすぎた。

「あはははは。あんたは死んだんだよ。体なんか、ないよ」

「でも、あったかかって、おっしゃるから」

「あんたの体全体、雰囲気があったかいのさ。死の産まれたてのほやほやだよ」

「死も産まれたてがあるんですか？」

「なんだって、始まりがあれば終わりがあるし、終わりがあれば始まりがあるじゃないか」

「ええ、そうですね」

老婆は、思わず納得する。そして、周りを見る。自分と同じように年をとっている者もいれば、自分の息子、孫ぐらいの年齢の者もいる。男もいる。女もいる。まだ、自分で立って歩けない

赤ちゃんもいる。誰かが背中におんぶしたり、胸に抱いている。

「一体、この行進は、どこへ行くんですか？」

「ずっと、ずっと向こうだ」

別のじいさんが会話には入り、指をさす。老婆は行進の先頭を見た。遥かか彼方に、前粒ぐらいの姿が見えた。老婆は遠い目をした。

二 行進風景

ここはM商店街。アーケードが連なる。T市の目玉のメインストリートだ。一時期は、郊外にショッピングセンターが乱立したため、駐車料金を払わないといけない商店街に足を運ぶ客は減り、また、商店街も、女性服など、ファッション関係の店ばかりで、対象のお客さんが限定されたため、客足は大幅に減少した。商店街のアーケードは、通勤・通学のサラリーマンや学生たちの、雨よけや日よけ、夏には暑さよけ、冬には寒さよけのためにしか活用されなくなった。

そこで、街の有志たちが、このままでは街の未来がなくなってしまうと危機意識を持ち、都市計画プランナーの力も借りながら、行政と一体となり、新たな街づくりに取り組んだ。その結果、街が再び、賑わうようになった。

商店街のドーム下では、毎週土・日曜日には、音楽関係など様々なイベントが開催され、人が集まるようになってきた。商店街に、街ぶら、人ぶら、の雰囲気に戻って来た。手には、ジュースやコーヒー、中には、だんごやてんぷらなどの食べ歩きしている者たちもいる。

人で賑わい、活気に満ち溢れる商店街だが、先ほどまで、道の真ん中を歩いていた人たちが、自然と両側に分かれていく。ちょうど、真ん中が空白地帯となる。

何故？街ゆく人も、何故なのかわからない。何かが見えるわけでもないし、何か聞こえるわけでもない。なのに、道の真ん中から左右に分かれていく。なんとなく感じるのだ。何を？何か道真ん中を闊歩している。だから、それを避けている。それも一人じゃない。二人でもない。集団だ。行列だ。だが、誰にも見えない。誰にも聞えない。そう、霊の集団だ。

みんなで歌おう
みんな仲間入り
聖者の行進
町にやってきた

誰でも歌える
声を合わせよう
ほら、聖者が来た
町にやってきた

笛や太鼓に、口笛、拍手。中には、靴を両手に持ち、鳴らす者。割りばしで空き缶を叩く者。みんな、思い思いの物で、音を鳴り響かせている。ちんどん屋？それにしても、服は洋服から和服まで、Tシャツ・短パンから背広にネクタイ、割烹着からドレスまで、様々だ。仮装パーティ？確かに喜んでる人もいるし、泣いている人もいる。顔の表情を変えない人も、顔が崩れた人もいる。死んだ時のままの服装や状況なのだ。先頭には、ポンチョをまとった男と幼稚園児ぐらいの男の子と女の子が歩いていた。彼ら霊は、どこへ行こうとしているのか。

三 あるある男

ある朝、D夫が起きると、死んでいた。や、やこしいなあ。どうしたことや。つまり、こういうことだ。

「や、やかましい」

D夫は、耳の中に飛びこんで来た大音響に目覚めたのだ。

「誰や。こんな、朝っぱらから、騒がしい奴は」と、言いながら、今が、朝かどうかはわからない。失業中の彼にとっては、毎日が日曜日。勤務を要しない日。勤務したいけど勤務を拒否された日。最近では、勤務することすら忘れてしまった日。勤務することがいやになった日。勤務したくない日。勤務という言葉が消え、ある日というだけになってしまった日。そう、彼にとっては、曜日の境目を必要としなくなったのだ。と、同時に、彼もある男となってしまった。

そんな日が続くにつれ、彼は夜遅く寝て、おてんと様が、頭の真上に来る頃に目覚めることが多くなった。昼夜、逆転現象だ。たまには、西日の暑さで目が覚めることもある。つまり、夕方まで寝ていたということだ。そんな訳だから、彼には、今が朝なのか、昼なのか、夜なのか、分からなくなっている。だから、「朝っぱらから。じゃかましい」というのは、正確な言い方じゃない。もちろん、ここで、彼の言語表現の間違いを指摘するつもりはない。とにかく、彼にとってはうるさいことに変わりはないからだ。

彼は思う。

「俺の睡眠を妨げるものは、何だって、許されるわけじゃない。俺が、誰かに頼んで、屋外ちんどん屋を頼んだ訳じゃない。う、う。まさか？ひょっとしたら、いつか飲んだ立ち飲み屋で、たまにしか会わない常連客(?)に、依頼したかも知れない。う、う、覚えていない。あ、あ、あ、あの時のことを思い出せ。もし、万が一頼んだとしたら、今、ここで、窓を開け、大声で「静かにしろ」と叫べば、相手に申し訳ないことになる。いくら、世間からつまはじきにされようが、義理人情に厚い俺様としては、例え、世間が非常識を常識としていても、俺の中での非常識なことはできない」

彼は、布団を跳ね飛ばし、いや、跳ね飛ばすことなく、そのまま起き上がった。

「な、なんだ。これは。手品か、マジックショーか。俺の体が、布団をすり抜けてしまったぞ。窓ガラスを開けようとしたら、右手もすり抜けてしまった。なんじゃ、これは」

彼は、じっと手を見つめる。だが、確実に、彼の手だ。皺もある。彼は、左手で、右手を握ろうとした。ここでようやく、彼は真実を悟った。彼の左手は、右手を握れずに通り過ぎてしまったのだ。

「おお、なんてことだ。いつの間に、右手と左手がこんなに仲が悪くなったのだ。握手さえもできなくなったぞ。いや、待て。俺は何を馬鹿なことを言っているんだ。いくら仲が悪かったとしても、ぶち当たって喧嘩することぐらいできるはずだ」

彼は、再度、両手を見る。どう見ても、糞は掴んでも、金がたまりそうな手ではない。唯一の誇りは、生命線の長さだった。

「おおおっつと」

再度、手相を観た。彼は安心した。生命線は、カーブを切りながら、手首まで繋がっている。彼はかつて、あまりの貧しさ、人生への見通しのなさに、「死んでやる」と叫び、一度、発作的に、手首を傷つけようとしたが、あまりに、手のひらの生命線が短かったので、逆に、傷をつけて、生命線を伸ばそうとしたこともあった。それ以来、他人に誇れるぐらい生命線が長くなった。

「つまり、俺は、死んでやるといいながら、生きていわけだ」ということを悟る。いい話だ。

さて、彼は、再度、手のひらを確認する。生命線は昨日のとおりだ。図書館で借りた手相の本を読んでから、毎日、日記を書く代わりに、手相を確認するのが日課となった。もちろん、手相を観たところで、昨日の長さと同じの長さを覚えている人はいない。

だが、彼は違う。彼は彼なりの科学的証拠を探し求めた。そこで、彼が思い付いたのは手のひらの線作戦だ。

「何、もう一度、自殺をしたい、のかいだって？ブーだ。統計学的に、自殺を試みて助かったものは、もう二度と、自殺を試みないらしい。もちろん、何度でも、自殺を試みるものはいる。統計は、結果であり、総計だ。どんな世界でも、少数派は必ずいる。それが、俺だ」

話を戻す。彼の手のひらの線作戦だが、生命線の末端に、赤ボールペンで印を付け、前日より長くなっていないか、短くなっていないか、確認するわけだ。常識的に考えれば、日差しじゃあるまいし、生命線が伸びたり、ちじんだりするわけではない。だが、彼は強迫観念にかられて、毎日、手のひらを、生命線を確認するようになった。

彼のモノローグが続く。

「だからこそ、長生きすると確信していたのに、一体、このざまは何だ。もちろん、俺も、本だけの知識じゃ信用できないから、占い師に相談したことがある。〇〇の母だっけ。母と言っても、俺の実母じゃない。確か、自らの存在を誇示するかののように、全ての肉塊が外に溢れ、津波か土石流のように、他人の人生までも飲み込もうとしている体型だった。俺は、圧倒された。毎日、ろくなものを喰っていない俺にとって、土偶が化粧をしたような〇〇の母は、思わず仰ぎたくなるとともに、なんかちょうだいと、手を差し出したくなるほどの風格を備えていた。

それなのに、「はい、三千元」と〇〇の母（長い風雪が、彼女の心を黒く汚してしまい、清音から濁音がついたババになってしまったのだ。何と、嘆かわしい）が手を出す。俺もすかさず、手を出す。先に見てくれ。後だしじゃんけんは厭だ。ババも手を出す。先に金を出せ。見た途端、ダッシュで逃げる客だろう。お互い、声にはを出さないけれど、腹のうちはこう思っている。まずは、手相。まずは、金。互いに譲らない。小さな台の上に四つの掌が上を向く。もちろん、手のひらの上には、たなからばたもちも、二階から眼薬も落ちて来ない。うーん、いやになっちゃう。

互いに、手のひらを見つめる四つの眼。緊張しているのか、周りの空気が冷たいのか、手のひらか湯気が沸き上がる。「うーん、見えた」無言の戦いの中で、先に声を発したのは占いばあさんの方であった。やはり、金が欲しいらしい。

ばあさんが叫ぶ。「あんたは、死ぬまで生きられるぞ」俺はガクツとした。当たり前じゃ。そう、心の中で突っ込みながら、大きく肯く俺。ばあさん曰く。「わしは、手相だけじゃなく、人間

の体から発せられる体温や息、呼吸などから、その人の人生が占えるんじゃない。日本では初めて、いや、世界でも、この占いができるのは、わしだけじゃ」と、今、思い付いたようなことを自慢げにおっしゃられる。「名付けて、「オーラ占いじゃ。どうじゃ」

どうじゃと言われても答えようがない。反対に、「オラオラ、ふざけやがって」と占いばあさんのしなびた胸倉を掴みたくなりそうだ。だが、ばあさんの一言「心配しなくても、あんたは、長生きするよ。ほら、見てごらん。手首まで生命線が伸びているじゃないか。長生きの証明だよ」と、何の根拠もないけれど、力強い応援の言葉をいただいた。もちろん、長い生命線は人工物のものだが。

そうだ、それなのに、何故、俺は死んだんだ。じっと手を見る俺。観相料は三千円を二千円に値切った。千円分ケチったのが原因なのか。それで、千円分早く死んだわけか。そうすると、俺の命は一秒、一分、一時間、一日、一月、一年当たり、いくらになるんだ。その程度の価値しかないのか。

おおおおっ。今、気がついた。俺の生命線のまん中ほどが途切れている。そう、つながっていないのだ。これが原因で、俺が死んだのだ。くそっ。占いばあさんめ。生命線の最後尾だけ確認して、真ん中を見逃しやがった。中抜けだ。これも、千円ケチったせいかな。

それじゃあ、生命線が途切れた後の、生命線はどうなるのだ。糸が切れた凧じゃないけれど、生命線だけが生きられるわけではないだろう。後半部分の生命線は、何の意味があるんだ。まさか、単なる皺なのか。それとも、後半部分が、俺の死んだ後の、生命線なのか。死後の生命線。死命線。そんなものあるのか。なんだか、馬鹿馬鹿しい。まあ、兎に角、俺は、死んだことだし、今さら、ばたばたしても仕方がない。ここは、じっくり、死後の世界を生きるしかない」

D夫は、自分が死んでいることを確認させていただいた、あのじゃかましい音の存在を見ようとした。窓を開けなくても、体が勝手に外に出る。

「しまった。ここは、二階だ。下に落ちてしまう。何を隠そう、いや、隠しているわけではないが、俺は、高所恐怖症なんだ。そのくせ、旅行に行ったら、お城の天守閣や高層ビルの展望室に上がり、街の全景や真下を眺めたがる。豆粒ほどの車や人を見ると、地面に吸い込まれそうな感覚になる。足ががくがくする。だが、ぎりぎりまで窓際に近付いていく。目の前のガラスを突き破って落ちたらどうなるんだろうか。死ぬのに決まっている。自分が落ちていく様子を頭の中で想像する。地面に激突したら死。その死ぬまでの間の浮遊感覚。一体、どんなものだろう」

D夫は遠い目から近い目に切り替えた。

「なんだ。こいつら」

D夫が見たのは、本当に、この世に生きていた時に、この街で住んでいたのか、と思わせるような奴らばかりだった。

「俺は、こいつらと同じ空気を吸い、同じ街に住み、ひょっとしたら、どこかのスーパーや商店街、喫茶店、駅、バスの中、開店前のパチンコ店の前、酔い倒れた地下街のベンチの前で、会っていたかもしれない。だが、覚えてはいない。しかし、何か、匂い、そう、何日も風呂に入っておらず、乾いた汗の上から、また、汗を掻き、汗が何層にも積み重なり、結晶がかさぶたとなったような汗だ。また、服も、下着から始まって、シャツやズボンに着替えられず、汗が瞬間接

着剤のように、皮膚と衣服をひっつけ、亀の甲羅や爬虫類の皮膚のように同化している。へたに引きはがそうものなら、血だらけになってしまいそうだ」

D夫が見た霊たちは、この狭い町に折り重なるように座りこんでいた。まさか、自分が生きている時に、こんなに多くの霊がこの街に住んでいる(?)とは思ってもいなかった。だが、現実には、霊たちはいる。街を循環するバスの屋根の上に座り込み、足をぶらぶらさせたり、ハトと並んで電線にぶら下がっていたり、どこへ行くあてもないのか、道路の上で正々堂々と横たわっていたりする。その体の上をトラックやバス、商用車のタイヤが踏みつけていく。霊たちは、タイヤにお腹を踏まれるたびに、頭と足をV字型に持ち上げ、腹筋運動を繰り返している。その数、何百、何千、何万だ。まさに異様な光景だ。この世の地獄だ。

D夫は、自分は死んでいるんじゃないかと、夢を見ているんじゃないかと、頬をつねる。痛くない。「やっぱり夢か。それとも死んでいるのか。よくわからん。まあ、どちらでもいい」D夫は自分の部屋から出ようとした。ドンドン。扉を叩く音がする。

「誰だ」

「D夫さん。D夫さん」大家さんの声だ。

「俺ならいるよ」返事をするが、相手には聞こえないらしい。

「あたしが開けます」「お願いします」大家さん以外にも誰かいるらしい。ガチャガチャガチャ。鍵を回す音。このおんぼろアパート（安い家賃で借りているくせに、大家さんごめんなさい）は、元々建て付けが悪いせいなのか、古くなって歪んできているのか、D夫が乱暴に取り扱ったのか、ドアの開閉がしづらい。ドアをちょっと斜めに持ち上げながらでないとは開かない。このちょっとしたコツが、長年住んでいる者でないとわからないのだ。どうだ、すごいだろう。これこそ、学校では習わないけれど、社会で生きて行く知恵なのだ。（そんな大げさな）。

D夫は、大家さんがドアを開けるのに苦労しているので、助けてあげようとドアに近づいた。「開いた」ドアが急に開き、D夫の顔面にぶち当たる。だが、大丈夫。ドアは素通りした。勢いよく入って来たのは、大家さんと警察官二人。D夫の体に近づき、「D夫さん。D夫さん」と大声で叫んでいる。

「そんなに叫ばなくても。聞こえるって言うのに」D夫は、後ろから大家さんの肩を叩こうとしたが、手は通り過ぎ、一回転して舞い戻った。片手クロールだ。だが、空気を搔いても前には進まない。そんな彼の一人芝居に誰も気づいてはくれない。

「こりゃあ、死んでいるね」一人の年配の警官が呟く。

「殺人事件ですか？」大家さんが恐る恐る聞く。

「外傷はないから、違うね」

「じゃあ、自殺？」

「うーん。検視してみないとわからないけれど、手首を切った跡もないし、薬物を飲んだ様子もないから、心臓麻痺かなんかじゃないですか」

「心臓麻痺ですか」

「なんかとは何だ。十把ひとかけらみたいに、人の死を扱いやがって。だけど、死因は心臓麻痺か。どうりで、最近、胸が苦しいと思っていたんだ」

D夫も三人の横に並ぶ。掛け声をすれば、一、二、三、四。そう、ぴったし、四番目で死だ。

D夫は失業してから、金がないため、ろくな物を食べていない。もちろん、病院なんて行けるわけがなかった。

「この後、どうしましょうか？」大家さんが尋ねる。

「とりあえず、死因を確認する必要がありますので、検視します。今からお医者さん呼びます。何にも触れないで、このままの状態にしておいてください。それと、この方に身内はいいますか？」

「さあ、わかりません」

「賃貸契約書に保証人が書いていませんか？」

もう一人の若い警官が質問する。

「うちは、安アパートなので、そんなものはありません」

「そうですか。まあ、少し、部屋の中を探してみて、手紙か何か手掛かりになるようなもの見つけましょう」

警官二人と大家はD夫の部屋の中の荷物を探し始めた。

「探したってなんにも出てやきないよ。俺は天涯孤独なんだ。それに、いつまでも、ここにいっても仕方がないから出て行こう。あばよ。これまで、ありがとうな」

D夫は、自分の肉体にお別れをすると、二階の窓から外に飛び出した。

「いったい、何だ。こりゃあ」

街の至る所に、霊がたむろしていた。自分の部屋の窓から見て知っていたものの、いざ、自分が街を歩くと特別な光景だ。喫茶店の窓ガラスにへばりついていたり、道路の並木にぶら下がっていたり、歩いている人に抱きついていたり、肩の上に勝手に肩車状態で座っていたりしている。

生きていた時には見えなかったが、まさかこんなに多くの霊が、街の中に住んで(?)いるとは思わなかった。今、思うと気持ちが悪くて仕方がない。そう言いながらも、いざ、自分が死んで、こうして歩いていると、当然の気持ちである。人間の感情は、生きている時も死んでいる時も、やはり自分勝手な生き物、いや、死に物なんだと、今さらながら感心する。

生きていた時と同様、繁華街を歩いていると、自分の体を自転車が通り過ぎたり、歩行者がぶつかってきたりする。それでも、体が透明のため、突き抜けるだけで、痛みは全く感じない。ひととおり街を散歩しながら、駅前までやってきた。

D夫が住んでいた(今も、住んでいると言えば住んでいる)街は海から開かれ、今も、フェリーや高速艇がひっきりなしに、港に出入りしている。その港付近は、十年前ぐらいに再開発され、JRの駅とバスターミナルと港が近接し、交通の結節点となっている。

駅の北側には、街の発展の象徴として、高層タワーが建設された。D夫は、暇な時(失業してからは、いつも暇であった)は、金のかからない楽しみとして、タワーの展望室によく上がった。さっき、自己申告したように、高い所が好きなくせに、いざ、展望室の窓ガラスに近づくと足が震えた。怖いもの見たさであり、怖いもの避けたさがあった。おお、アンビバレンツ!

D夫は、生きていた時と同じように、タワーに行こうとした。バスの待合室にも、駅の通路

にも、横断歩道にも、霊がうじゃうじゃしていた。タワーのエレベーターに乗ろうとした。生きている人間が待っていた。団体さんだ。

「お前、何してんだ」

いきなり声をかけられた。周りを見渡す。見えるのは人間たち。誰もD夫のことなんか気付いていない。

「気のせいかな」再び、エレベーターのドアの前に立つ。

「エレベーターなんか使わなくても、展望室に上がれるぞ」確かに聞いた。自分に向かって話している。振り向くまでもなく、天井から逆立ちしてぶらさがった男の顔が目の前十センチ先にあった。

「ひゃあ」驚いて、後ろに下がるD夫。

「びっくりすることないだろう。俺もお前も霊なんだから」

男は、天井から飛び降り、通路の隅に立ち、D夫を手招きした。D夫は近づいた、これまで、数多くの霊を見てきたけれど、話掛けられたのは初めてだった。霊は口がきけないもの、口がないものだと思い込んでいたのだ。もちろん、D夫が生きていた時、街を歩いていて、他人から声を掛けられることはなかったから、死んでも、状況は一緒だ。なんのこっちゃ。

D夫は、同じ霊に呼ばれて近づく。

「はじめまして」我ながら、馬鹿な切りだし方だと思ったが、他に言葉が思い付かなかった。「いい天気ですね」の時候のあいさつもがあったが、これはさすがにやめた。

「遠慮することないよ」男は答える。男は、髪が長く、一枚ものの布の真ん中に穴を開け、頭を通していた。どこかで見たことがある。山登りの時に雨除けに使うポンチョだ。安上がりの服だな。D夫は思った。

「何でも、シンプルが一番だからな」男はこっちの心を見通せるらしい。

「あんた、自分が死んでいること知っているだろう」D夫は頷く。

「死んだら、生きていた時のしがらみや、地球の重力からも自由になれるんだ。ほら、こうして手を羽ばたくだけで、宙に浮けるんだ」

男は、自分の両手を上下させた。男の体は地面から離れ、天井にまで浮かんだ。子どもの手を離れた風船みたいだった。

「ほらな。あんたもやってみろよ」D夫は、鳥の雛が巣立つ時のように、見よう見まねで手を上下させた。

「うわあ」手加減がわからなかったもので、バタバタと強く上下させたものだから、男のようにふわっとじゃなく、ブワッと上昇した。男がD夫の袖を引っ張らなければ、あやうく天井にぶつかるところであった。もちろん、天井にぶつかっても、素通りするだけだが。

「ありがとうございます」D夫は礼を言った。

「いやいや、こちらこそ。あんた、まだ、死んで間もないだろう」

「わかりますか」普段は相手に関係なく、タメ口をきくD夫だが、目の前の相手には、何かしらの威圧を感じ、丁寧語を使ってしまう。

「わかるよ。わかる。だって、まだ、生温かいもの」

「えっ、本当ですか」D夫は自分の体を触ろうとするが、手はすり抜ける。

「いや、冗談だよ。冗談」目の前の男は、長く伸びた髭を触りながら、「あんた、なかなか、素質があるぞ」とD夫に向かって言う。

「素質って、何ですか。俺、恥ずかしいけど、生きていた時、失業者だったんですよ。何の能力もなく、資格もなく、求人広告に申し込んでも落とされてばかり。ホント、いやになっちゃいましたよ。そんな、俺に何の素質があるんですか」D夫は首をかしげる。

「そんなこと知ってるよ。あんたの過去は全部知ってるよ」

「どうして、俺。いや、私のことを知っているんですか。あなたは、神様ですか？」

「よく、わかったな。そうだ、あたしは、わしは、私は、オイラは、俺っちは、神様だ」

フーテン暮らしのじいさんが胸を張る。（いつから、フーテンのじいさんになってしまったんだ。くれぐれも、身なりだけで、人を判断しないように）

「嘘でしょう」いくら世間知らずのD夫でも、正々堂々と神様だなんて言われると疑ってしまう。神様はやはり謙虚でなくちゃいけない。

「そのとおり、嘘だ。あっ、はっ、はっ、は」フーテンが腰に手を当て笑い出す。

「ホントは、あんたの額に、あんたのこれまで生きてきた人生の映像が流れているんだ。それを見りゃあ、誰だって、あんたのことがわかるよ」

「本当ですか？」D夫は自分の額に手をやる、だが、その手は通り過ぎるだけ。

D夫は入り口のドアの前に立つ。ガラスの向こうには、放置自転車と植栽が仲良く並んでいた。

「残念ながら、自分では見えないじゃ」

じいさんが本当に残念そうに答えた。

「だけど、自分が歩んできた人生じゃ。思い起こせば全てわかるだろう。もちろん、自分に都合の悪いことは封印しているだろうけどな」

D夫は再び、ガラスの前に立つ。やはり、自分の姿はもちろんのこと、額の映像も見えない。自転車のサドルにハトが止まっている。仲間が増えたらしい。仲良きことは善きことかな、だ。

「どうして自分に見えない映像が流れているんですか？」

「さあ、わしもわからん。自己紹介のための名刺みたいなもんじゃないか」

D夫は、フーテンじいさんを見る。じいさんの額にも映像が流れていた。産まれて直ぐの赤ん坊なのに、立ち上がり、三歩歩いて天に向かって呟いているシーン。海の前に佇み、大声で叫ぶと海が真っ二つに分かれ、道ができるシーン。何かを抱えながら山に登り、その抱えた物に自分の体を縛り付けられているシーン、などだ。どこかで見たような気がする。

「そんなに、俺を見つめるな。恥ずかしいじゃないか」フーテンじいさん、柄にもなく、顔を赤らめ、はおっているマントもどきで、顔を隠す。じいさんが続ける。

「ホントに、あんたは、素質がある。気にいった。さあ、わしと一緒に来い」

「来いって、どこに？」D夫は首をかしげる。

「ここだ」フーテンのじいさんは、D夫の手を握ると（D夫は、自分の手で、自分を握れなかったはずなのに、じいさんは、いともたやすく、D夫の手を固く握りしめることができた。不思議

議だ) どんどんと上昇し始めた。二階、三階、五階、十階、二十階、三十階と、天井と床を次々とクリアしていった。

「どうだ、絶景だろ」そこは、ビルの最上階の展望室。先ほど、一緒にエレベーターを待っていた団体さんたちが、「こりゃ、すごい」と窓ガラスから街並みを見つめていた。確かにすごい光景だ。街中の至る所に、霊がたむろしているのだ。道路もビルも、中央道路のケヤキ並木も、今は天守閣がない城跡公園も、タワーの真下の海浜公園から遙かかかなたに見える山から島まで、霊がいっぱいだ。お代わりはいらない。もう、見るだけで満足だ。

「私を始め、どうして、こんなに霊がたくさんいるんですか」D夫はフーテンじいさんに尋ねる。

「行き場がないんだよ、行き場が」

「行き場？」

「そう、行き場だ。本来なら、死んだ人間の魂は、それぞれ思いや考え方が異なるから、天国やあの世、浄土などに行くべきなんだが、それがこうしてここに立ち止まっているんだ」

「どうして立ち止まっているんですか？みんな行き先は知っているんですか？」

「そりゃあ、もちろん、知っているさ。だが、リーダーがいない」

「リーダーですか？」

「そう、リーダーだ。みんな、烏合の衆、会議は踊る、船頭多くして船動かず、状態だ」

「はあ」

D夫は、もう一度、展望室から街を眺める、霊たちは、何をするわけでもなく、ただ立ち尽くしたり、寝転がったり、ベンチに座って足をぶらぶらさせたり、と、暇を持て余している。

「どうして、みんな、自分の行き場に行こうとしないんですか」

「みんな、誰かが動き出すのを待っているんだ」

「みんな、この街で死んだ者ですか？」

「いや、違う。よそから来た者もいる」

「よそからはどのようにして、ここにやって来たんですか」

「わしが連れてきた」

「あなたが」

「そうだ。わしだ」フーテンじいさん、胸を張る。だが、大風呂敷の服のため、本当に胸を張っているか、本当のことを言っているのかわからない。

「それじゃあ、あなたが、引き続き、あの行き場を失った人たちを連れていけばいいじゃないですか」D夫は、訝しそうに尋ねる。

「いやあ、疲れたんじゃ」

「疲れた？」

「そう。ベリー、ベリー、タイアードじゃ」

「ベリー、ベリー、タイアード、ですか？」

「そうじゃ。それで、こうして、ここに休んでおる」

「このままでいいんですか？」

「このままではよくない」

「それじゃあ、どうすればいいんですか？」

「どうすればいいと思う？」

「誰かがリーダーとなって、この行き場を失った霊たちを闇の国か、明るい国か、悟りの地か、地獄かに連れていけばいいんでしょう」

「そうじゃ。卓球」

「それも言うなら、ピンポンでしょう」

「そうとも言う」

D夫はフーテンじいさんと会話をしているうちに、知らない間に、主導権を得て行った。いや、取らされようとしていた。

「フーテンじいさん。いや、神様。どうして、あなたは疲れたんですか」

「わしは神じゃない。単なるリーダーだ。わしは年をとった。ほらこの腰の曲がり具合を見ろ」

じいさんは、ポンチョの中で、腰をかがめる。大風呂敷のため、本当に、腰が曲がっているかどうかはD夫にはよくわからない。

「それじゃあ、後はどうするんですか」

じいさんが、にやっと笑った。

「そこで、お前じゃ」

「お前って、私ですか」

「わしの目の前にいるのはお前だ。だから、御前だ。お前しかいない」

D夫はあたりを見回す。生きている人間たちの姿はあるが、不思議なことに、この展望室には霊の姿はない。

「いくら辺りを見回しても無駄じゃ。ここには、選ばれし者しか来られないんじゃ」

じいさんは、また、胸を張る。

「はあ」何となく不安なD夫。

「何も心配することはない。あんたも選ばれし者じゃ」

「はあ」訳のわからないじいさんに選ばれたので、余計に不安になる。これまで、会社に履歴書をさんざん送付してきたが、選ばれたのか、選ばれなかったのか、書類選考で落とされ続けた。今さら、選ばれたと言われても、誰が信用するか、という気持ちだ。

「なんか、わしを疑ってるな」じいさんは、D夫の顔の前に顔を突き出す。

「そんな、ことは、ありませんよ」D夫は首を振るものの、内心は、変な姿のフーテンじいさんを信用していない。

「まあ、いい。すぐに信用するようになる。そこでじゃ、D夫さん」じいさんが初めて、D夫の名前を呼んだ。

「どうして、わたしの名前を知っているんですか？」

「さっき言ったろ。あんたの額に、あんたのこれまで歩んできた人生が映し出されているんじゃ。名前ぐらいわかるわい」

D夫は思わず額に手をやる。手をやっても何もわからない。展望室の人間をすり抜け、窓ガラ

スの一番前に近づく。ガラスには何も映っていないので、よくわからない。相手の言うがまま、なすがままだ。

「まあ、それはいい。見ろ、この街の風景。霊たちがどこへ行くあてもなく、彷徨う姿を見て、どう思う」

「どう思って言われましても・・・」

「この亡き人たちを救ってやろうとは思わないか」

「はあ」

「はあ、じゃない。みんな、困っているんじゃ。誰かの後ろを着いていきたいんじゃ。誰かリーダーが必要なんじゃ」

「リーダーはあなたなのでしょう？」

「わしはここまでのリーダーじゃ。次の道程は、新しいリーダーが必要なんじゃ」

「そう、言われましても・・・」

「あんたも、昔は、会社人だったんだろ。会社は、辞令一枚で、いろんな課に配属される。国内の営業所のあちこちに移動させられることもあるじゃろうし、海外の支店に飛ばされることもある。どうじゃ、そうだろう」

「そうですが・・・」

「それじゃあ、決まりだ。おまえをこの霊たちの行進リーダーに任命する。〇年〇月〇日 〇〇聖者」

じいさんは、ポンチョの服の下から、紙を取り出し、読み上げ、辞令を突き出す。口を開けたまま、ペリカンのようにとまどうD夫。

「さあ、受け取れ」じいさんに強要され、手を出すD夫。

「よ、確かに受け取ったな。今日から、お前が、この霊たち、いや、聖者たちのリーダーだ。この迷える羊どもを、導いてやってくれ。その前に、その寝まきみたいな服をなんとかしないといけないな」

D夫は一日中、ジャージを着ていた。これなら、寝る時も、起きてからも、着替えしなくていいからだ。

「よし、記念にこれをやろう」

じいさんはいきなり、自分のポンチョを脱ぐとD夫に被せた。頭がひっかかってなかなか入らない。じいさんの頭は意外に小さかったのだ。いや、D夫の頭がでかかったのかもしれない。

「じゃあな、D夫」

「ちょっと、ちょっと。ちょっと、待ってくれ。いや、待ってください」

D夫は慌てて被り物の頭を通し、辺りを見回すが、フーテンじいさんはもうそこにはいなかった。一人取り残されたD夫。

「ええ、くそっ。俺が、あのゾンビみたいな奴らのリーダーか」手の辞令をじっと見つめながら、街を見渡す。さっき見た通り、ビルや小学校、県庁や市役所、道路、公園に、何するでもなく、霊たちがうじゃうじゃとたむろっている。

「あっ、見つけた」子どもの声がした。後ろを振り向くD夫。子どもの霊がいる。男の子だ。女

の子もいる。

「こんなことにいたの」

「もう、休憩は飽きたから、そろそろ行こうよ」D夫の手を握って、歩きだそうとする。

「いやあ。俺は、俺は、フーテンのじいさんじゃないぞ」

「フーテンのじいさん？」

「だって、その服を着ているじゃない」

「これは、俺の服じゃない。こんなもの」

D夫はポンチョを脱ごうとしたが、首回りが小さくて脱げない。さっき、強引に頭を入れ込んだせいだ。

「さあ、行こう。行こう」子どもたちは、D夫の手を引っ張り、タワーの展望室から外に飛び出した。

「ああ、落ちる」D夫は叫ぶが、子どもたちは反対に、「ひゃっほー」「気持ちいいね」と喜んでいる。このまま地上に激突かと思われたが、ポンチョがパラシュートのように開き、ふんわりと着地できた。

降りた先は、街の中央公園。元はお寺で、その後、県営球場ができ、高校野球や夏祭りのメイン会場として使われていたが、今は、樹木と芝生と水辺とベンチが溢れる市民の憩いの場所となっている。もちろん、市民だけでない。行き場を失った霊たちも何することなく佇んでいる。その芝生の真ん中に、子どもたちに連れられたD夫が舞い降りた。

最初、霊たちは誰もD夫の存在に気が付かなかったが、ふと、ポンチョに目が止まった。「おお」「あら」「リーダーだ」「また、戻って来てくれたぞ」「よし、行こう」と声を上げ、次々とD夫の前に集まりだした。その数、十、百、千、すぐに中央公園を埋め尽くした。

「さあ、みんな。一緒に出発するよ」D夫を公園に連れてきた男の子が叫ぶ。

「そうよ。また、みんな、一緒よ」今度は、女の子が叫ぶ。

「出発するって、どこへ？」D夫は、男の子と女の子に小声で尋ねる。

「それは、リーダーが決めるのよ」

「みんな、あなたに付いていきます」二人に言われて、よけいにとまどうD夫。

「出発だ」「ここでの休憩はもう終わりだ」「俺たちに明日はあるぞ」「とにかく、前に進もう」「リーダー、リーダー、リーダー、リーダー」

集まった霊たちから激が飛び、鬨の聲が上がる。

「さあ、行こうよ」

「あなたの出番ですよ」

二人の子どもに促され、D夫は意を決する。「よし、行こう」D夫は拳を握り、手を空に向かって突き上げる。霊たちの添乗員だ。

「うおー」

ポンチョ姿のD夫を先頭に、男の子と女の子がその両側で、霊たちの行進が始まった。

ある男がつぶやく。「どこへ行くのかなあ」ある女が答える。「きっと、天国よ」

「俺、生きていた時、他人に迷惑ばかりかけてきたからなあ」

「じゃあ、今から、人のためにいいことしたら」

「いいこと？」

「いいことよ」

「どんなこと？」

「例えば、この行進から取り残されている人に声を掛け、この行進に誘うこと」

「それなら、俺にでもできる」

男は行進から離れ、道端で座っている霊たちに声をかけ始めた。女が手招きして呼んでいる。霊たちは、とまどっている重い心をようやく持ち上げ、行進に加わった。

D夫を先頭にした行進は商店街を練り歩き始めた。ベンチに座っていた霊たちも立ち上がり、行進の輪の中に入っていく。

四 指先の魔術師

「なんだ、これは」

A吉は七十歳。ある朝、目覚めたら（？）、死んでいることに気が付いた。いや、死んでいるのは自分の体であって、自分の心というのか、自分の魂というのか、自分の意識は生きていた。いや、これを生きているというのかどうかはわからない。深く、長い眠りだったような気がする。一年中敷きっぱなしのふとんの横で、目覚まし時計が鳴っていたような気がする。が、今は、時計の針が止まっていた。針は十時十分だ。

A吉が、自分が死んでいることに気が付いたのは、時計が止まっているのを確認し、よっこらしょ（そう、二十年前、つまり、五十歳のときから、かけ声を上げないと次の動作に移れなかった）と声を出し、起きあがったときのことだった。

昨日までは、足の膝が痛いため、両手をつかないと立ち上がれなかったのに、今朝に関しては、いやに、簡単に起き上がったのだった。変だなと思いながらも、通信販売のサンプルで取り寄せた、ひざ痛に聞く、グルコミ酸だか、グリコのキャラメルだかわからない健康食品を昨晚、寝る前に飲んだのが効いたのかと思ったが、そんなに急に効果があるわけない。

会社だって、早急に効果があるような商品は、未来永劫売れ続けないので、ぼちぼちとしか効果がないような商品を作るはずだ。まあ、気のせいだと思い、立ち上がった。そう、たかだか、朝、目覚めて、立ち上がるまでに、一度に、これらのことを全て考えるなんて、不思議だと思った。

昨日までは、一日中、ぼおとしていて、考えることなんかしなかったからだ。よほど、寝過ぎて、頭の中がすっきりしすぎた、つまり、ひょっとしたら、脳みそまでが流れ出してしまったんじゃないかと、思われるくらいだった。

が、まあ、そういうこともあるのか、いや、あったら困ると思いながら、起きあがったわけだ。体がいやに軽かった。ここ、二～三日、パンの耳とか、インスタントラーメンを齧るとか、みかんの皮を風呂にいれるとか（全く、関係ないか）していないせいなのか。

A吉は、そのまま、ふわりふわふわと台所に向かった。一LDKの部屋。布団に相對して、キッチン（そんなうまげな、どこの言葉や）があった。喉が渴いたことと、顔を洗うために、水道の蛇口をひねろうとした。だが、上手くつかめない。なんか、素通りしてしまう。歳をとったので握力が弱ったのか。

A吉は、何かの本か新聞で、歳は足や手からとると書いていた記事を読んだ。それ以来、健康に留意し、道路を散歩しながら、また、風呂の中でスクワットしながら、両手グーパーを百回続けている。（どうだ、一挙兩得だ。）

特に、散歩は自分の正業である、他人の所有物を、一時的または永久に借りうける仕事（つまり、泥棒、だが、大したものではない。俗に言う、こそ泥である。）を、暇があれば、（いや、食っていくためだ。暇じゃなくてもやる。）続けているため、確実にクリアしている。健康でも何でも、何か、目的があれば確実に毎日実践できるのだ。

ただ単に、健康のためという抽象的な概念では、疲れて、腹が減るだけで、何のメリットも

ない。風呂場でのグーパーも同じだ。握力をつければ、いざというとき、重たい荷物を運べるのだ。例えば、テレビや冷蔵庫（これは無理か）、タンス、パソコン、椅子、枕、ふとんなのだ。ちょっと待て。一体、俺は何を考えているんだ。そんな物、明るい時間に運んでいたら怪しまれて、警察に通報されて、しまう。

テレビで思い出した。話は変わる。昔、はたちの頃、A吉が、まだ、他人の物を拝借することの初心者マークをつけていた時だ。その頃は、まだ、彼もうぶで、他人の物を永久に借りうけ、それを別の他人にお金と交換して流通させることができなかつたとき、手初めに行ったのが、自分の家族の物を活用することであった。

昔の頃だから、兄弟がたくさんいた。兄が三人に、姉が四人だ。恥かきっ子の末っ子で、一番上の姉とは十五歳、すぐ上の兄とは五歳離れていた。A吉が中学を卒業する頃、姉や兄たちはもう社会人で、自分たちで生計をたてていた。A吉は、高校へ行かず、仕事もせず。毎日ぷらぷらしていたが、遊ぶ金欲しさに、近所に住む姉や兄たちの家に無断で入っては、小銭を拝借していた。だが、そのうちに、兄や姉たちも、家の中のお金がなくなること、つまり、A吉俺がお金を拝借していることに気が付いたのか、家にお金を保管しなくなった。当然、A吉の遊ぶ金の補給先がなくなった。

ここで、A吉の経歴を簡単に紹介しておこう。

生まれはB県C町で、実家の周りは田んぼで、ちょっと行けば、山だ。兄弟は七人。長女、長男、二男、二女、三女、三男、最後が、A吉だ。長女とは十五歳の年齢差で、実質上の育ての母は、長女であった。

A吉は、末っ子であったせいか、家族の誰からも可愛がられたが、たくさんの中の一人であることから、いてもいなくても、誰にも気にとめられなかつた。

大きい姉ちゃんや大きい兄ちゃんに栄養をとられてか、体は小さかった。だが、人生は不運が運(?)に変わる。放任されすぎの人生と小柄さを活用し、A吉は、自分自身の生き方を見つけた。自分の物は自分の物、他人の物は自分の物、この哲学をモットーに、A吉の人生が始まった。

まずは、身内から始めよ、も諺どおりに、親の金をくすんだり、兄弟の金を拝借したりした。A吉の行動は、狭い庭の中では収まらなかつた。その小銭を軍資金にして、宛てどのない旅へと旅立った。もちろん、宛てのない旅である。懐に北風が吹きだすと、よれよれのジャンパーを帆にして、南風、東風、西風を利用して、家に舞い戻って来た。

「A吉、いつ、戻って来たんだ。心配していたぞ」

おとんやおかんからは、愛情のある言葉を掛けられたが、兄弟からは総スカンであった。

それもそうだ。以前、旅立つ際は、兄の家のテレビやタンスを車に積み込もうとしていたところを、兄の子、つまり甥に見つかったからだ。おとんやおかんが、A吉の代わりに賠償したため、警察沙汰にはならなかつた。それなのに、また、性懲りもなく、家に帰って来たからだ。

A吉は、しばらくの間、家に滞在していたが、すぐにお尻がむずかゆくなってきた。座布団から立ち上がると、「ちょっと、行ってくる」の言葉とともに、「ちょっと、戻ってくる」の言葉

がないまま、二年から三年が過ぎた。

時には、国家公務員の宿舎に、国家公務員の監視の下、過ごすこともあった。それが、何年間も続いた。おとんも死に、おかんも死んだ。親子の契りが切れると同時に、兄弟姉妹の契りが、一方的に切られた。A吉は、再び、糸の切れた凧となった。

A吉は商店街のベンチに座っていた。生きていた時の、お気に入りの場所だ。生きていた時は、金がないので遊ぶことができないため、日が一日、座っていた。死んでからも、行き場がないので、知らない間に、足（そう、死んでいるのに足がある）が、商店街に向かっていた。いつものように、ベンチに座り、街行く人を眺めていた。そこに、楽しい音楽が聞えて来た。

「なんだ。あの音は。イベントか」

A吉は、生きていた時、神社仏閣の賽銭泥棒だけでなく、イベントも荒らした。イベントの場合、盗みを働くのではなく、会場の飲食店テントを回っては、試供品等を食べ回った。A吉が何回も、何回もやってくるので、飲食店は、A吉の姿を見ると、味見の商品を隠すようになった。それ程嫌われたが、A吉は人に嫌われるのは別に何とも思わなかった。自分の好きなように行動しているだけで、人が自分をどう思おうとかまわなかった。

話を戻す。イベント荒らしのA吉だから、笛や太鼓などの音には敏感だった。勝手に足が動いた。

体が小さく、力もない。そのくせ、口だけは達者で、強がりばかりを言う。

「わしを舐めとったら、承知せんぞ。いつでも、お前ら、やったるで。わしは、何ともないんじゃ。いざとなったら、何するかわからんで」

これが、A吉の口癖であった。その口癖どおり、百五十センチ、五十キロの体を百八十センチ、体重百キロのように振舞う。だが、そんな彼を行進中の霊たちは誰も相手にしない。反対に、行進の中で、振り回されるA吉だった。キョロキョロと持ち前の癖で物色しているため、足を踏まれることもある。

「痛っ。誰や、わしの足を踏む奴わ」

もちろん、他人の足は彼の足を通り抜けるので、痛みを感じることはない。生きてきた時の習慣で、足を踏まれると痛いと感じてしまう「パブロフの足」になっているからだ。

みんなが行進中なのに、A吉が立ち止るため、後ろから来た者の肩が当たる。もちろん、肩は素通りするのだが、生きてきた時の習慣で、肩を押されると体は回ってしまうと信じ込んでいる「パブロフの肩」になっているせいだ。

A吉は「あーれー」と叫びながら、遊園地のコーヒーカップのように、右回転、左回転、時には、宙に放り出され、マット運動の前転、後転、開脚を繰り返しながら、生きていた時と同様に、人生に、他人に、翻弄されながら、

「待っていたあ。わしを置いていかんとしてえたあ」と、涙をこぼしながら、最後から着いていく。泣くのがいやなら、さあ、進め。なんと、前向きな姿だ。

だが、そんな姿をすぐに崩すのが彼の遣り方だ。転がりながらも、店舗の前に設置している飲

料水などの自動販売機の釣り銭口に手を突っ込んだり、道路に寝そべったりして、硬貨が落ちていないかを確認する。五体倒地だ。なんと、たくましい姿だ。

「くそっ、何もないや」

A吉は、商店街の右側の自動販売機、左側の自動販売機と、行進に遅れないように、ジグザグで動く。自分の意思で動いているように思えるが、ゲームセンターのピンボールゲーム機のように、他の人にはじかれて飛んでいるだけ。まさしく、彼が生きてきた人生であり、これから死んでいく人生でもある。ああ、なんて、他動的な人生だ。

A吉は、ふと思う。

「ちょっと待てよ。俺、死んでんだから、何をやってもいいわけだ」

そういうことについては、頭が回る。ついでに、首を百八十度回し、周囲を見渡す。

「おっ、コンビニだ。ひとつ、試してみるか」

A吉はコンビニのドアの前に立つ。

「や、奴だ」

このコンビニは、A吉が万引きして、警察に通報され、捕まった店だ。奴は、この店の店長。

「まだ、俺のこと覚えているかなあ」

A吉は、少し不安ながらも、コンビニ入ろうとする客の背中に隠れ、続いて入る。

「いらっしゃいませ」

店長が振り向く。客はドアを開けると、右に直角に曲がった。自分の体が店長の目にさらされた。だが、店長は直ぐにカウンターに目を落とした。何か書き物をしているようだ。

「俺に気がついていない。そうか、俺は死んでいるんだ。生きている人間には、見えないんだ」

A吉は小躍りする。どんなに派手に動いても、所詮、小粒の小躍りだ。

「それなら、何をやってもいいわけだ」

A吉はコンビニの一番奥に向かう。酒コーナーだ。

「景気づけに、一杯やるか」

ガラスケースのドアのレバーを握ろうとする。掴めない。もう一度、掴む。グーになるだけだ。死んでいるのだから、物が掴めないのは当たり前。頭の中はパーのままだ。

「くそっ。それなら、こうしてやる」

怒ったA吉は、直接、ガラスケースの中に、手を突っ込んだ。何にも遮られることなく、缶ビールに手が届こうとした。

「このビールが飲みたかったんだよ」

生きている間は、金がないから、安い第三、第四、第五の缶ビールばかりを飲んできた。それも、二、三日に一本だ。今、目の前には、飲みきれないほど、ビール風呂にできるほどの量の缶ビールが、自分のために冷やされている。なんて、嬉しいことだ。死んで極楽に来たんだ。

A吉は高級缶ビールを掴もうとした。だが、掴んだのは自分の指だけ。いや、自分の指も通りすぎていく。雲を掴むような手。

「なんじゃ、こりゃあ。これじゃあ、死んだ意味がないじゃないか。くそっつ。この店を滅茶苦茶にしてやる」

A吉は、自分のことは棚に上げて、怒りにまかせ、弁当やパン、お菓子、雑誌などの棚に体ごとぶつかっていくものの、体が通り過ぎるだけ。

「くそっ。こんな体に誰がした。それじゃあ、お前だ」

A吉は、自分を通報した店長に、カウンター越しに殴りかかる。逆ギレだ。まずは、右手。次に、左手。だが、いずれも空を切るだけ。A吉の怒りだけが空回りしている。

「おどれ」

大声を上げるものの、相手には聞こえない。カウンターに乗り上がり、レジスターからお金を抜き取ろうとするが、札束どころか、小銭すらもつかめない。

反対に、襟首を掴まれ、体を持ち上げられた。

「こら、何しているんだ。死んでからも、生きている人間に迷惑をかけちゃ、いかんだろ」

A吉がぶら下げられたまま、後ろを振り向く。そこには、以前、現役（生きていた時）にお世話（逮捕）になった、刑事がいた。

「ありゃ、デカさんも、この世界に来ていたんですか」

A吉は身長百五十センチ、デカさんは、身長百八十センチ。確かに、デカイ。

「お前の姿を見かけたんで、心配になって、後から追い駆けて来たんだ。ほら、案のじょうだ。やっぱり、こんなことしやがって」

「そりゃ、すみません」

「すみませんじゃないだろ。表に出て、頭でも冷やしていろ！」

デカの大声とともに、A吉は、店の天井、屋根をすり抜け、行進中の隊列の側に落ちた。

「あたたたた。死んでも痛いとは、納得がいかないなあ。それにあのデカ、何で、俺の襟首を掴むことができたんだろう」

座り込んだまま、首をかしげるA吉。A吉は「パブロフの肩」などパブロフ現象にまだ気がついていない。車道には、何万人にも、霊たちが行進している。その車道には、バスやトラックが、何の抵抗もなく霊たち通過し、がんばれ、がんばれと叫びながら、東へ西へ、南へ北へ、と、右往左往しながら走っている。

ようやく怒りが静まったA吉は座り込んだまま、霊たちの行進を眺めていた。そこに、同じくらいの年齢の、見知らぬおばんが、A吉の手を引き、行進の波に招き入れた。

おばんの姿は、年齢にそぐわない（年齢に合っているかどうかは、自分が決めるのではなく、他人が決めるのである）ピンクや赤の若々しい（他人から見れば、毒々しい）姿をしている。顔の化粧も濃い。いや、化粧が濃いのを通り過ぎ、都市区画整理で街が新しくなるように、顔面区画整理で、別人として生まれ変わっている。（死んだのに、生まれ変わるとは変だ）。

「あんた、変わんないね」

おばんは、前を向いて歩きながら、A吉に話し掛ける。

「ほっといてくれ、これまで七十年間もやってきたんだ。今さら変われるわけではないだろう。それに、あんた、なんで、わしのこと知っているんや？」

「ああ、知っているよ。正確には、今、知ったんやけど。あんたの胸に、あんたのこれまでの経歴が映像で流れているんだよ」

A吉は、思わず胸を見る。だが、何も見えない。反対に、おぼんの胸を見る。おぼんが、髪を振り乱し、荷物も振り回し、街で徘徊している姿が映し出されていた。

「ほらね。でも、残念なことに、いや、幸運なことに、自分では何も見えないんだよ。人から言われて初めて、気が付くんだ。でも、自分のやってきたことだから、忘れた振りはしていても、本当は、全部覚えているんだけどね。人間は、自分にとって、都合の悪いことは忘れるように、脳に命令しているだけなんじゃないの。いや、脳が命令しているうだけどね」

A吉は、ばあさんの胸に流れる映像を、目を点にしながら、しかし、瞳だけは眼球の中を転がしながら、見続けている。

おぼんの胸には、おぼんがやせぎすの男二人にはがい締めされながら、車に乗り込むシーン、それを振り切って逃げるシーン、自動販売機で缶コーヒーを買うシーン、飲みながら病院の前で座り込むシーンなど、が映し出されていた。

「いやだね、この変態じじい。いつまでもレディの胸を見るもんじゃないよ」と、言いながら、久しぶりの男の視線を受け、ばあさんもまんざらじゃなさそうな顔をする。女はいつまでたっても、誰かから注目されたいのである。男はそんな女にすぐに注目するのである。

「わたたちの体の中に、ブラウン管があるのかなあ」

「ブラウン管だって？あんたも古いね。今は、液晶の時代だよ」

「じゃあ、その液晶ってのが、体の中にあるのかねえ」

「さあ、その仕組みはわからないけれど、あたしたちが行進していても映像は映るから、たぶん、空の上から、電波が飛んできているんじゃないのかねえ。あたしも、古い人間だから、そのあたり、よくわからないんだけど」

「じー、ばー、じー、って言うやつか」

「それも、言うなら、GPSだろ」

A吉とおぼんは、空を見上げる。

「空には、それぞれの個人の記録が保管されているのかなあ」

「いわゆる、ライブラリーって、やつさ。ほら、雲が流れてきただろ。あの雲があたしたちの記録を保管している移動図書館なんだよ」。

「ほんとうか。それが本当なら、おーい、雲よ。わしの人生を元に戻してくれ」

「そりゃあ、無理だよ。雲は記憶装置だけだよ。自分の人生は自分で切り開かなきゃ」

「GPSだの、ライブラリーだの、難しいなあ。覚えきれないよ」

「そうだね。子どもの頃のことは忘れないくせに、昨日の夕食やさっき食べた弁当のおかずを覚えていないのと一緒さ」

A吉は、顎に手を遣る。今まで、自分がやってきたことを思い返す。確かに、おぼんの言うとおり、十八歳の時、実家のテレビを盗んで質屋に売ったことは、今でも鮮明に覚えているが、コンビニでの万引きや神社・仏閣での賽銭泥棒については、どれがどれだったか、いつがいつだったか、わからなくなっている。いやあ、それは、ただ単に、回数があまりに多すぎて、麻痺しただけなのかもしれない。

「わかるような、わからないような。わし、生きていく自信を亡くしちゃったよ」

「生きていくって、あんた、死んだんだよ」

「死んだ？あっ、そうか、わし、死んだんだ」

「そうだよ。あんた、死んだんだよ」

「死んだって、三つ子のたましい、百までって言うじゃねいか」

「難しいこと知っているねえ。でも、百歳までいかなくて、七十歳で死んだんだろ？」

「だから、残り三十年間は、生きてることになるんだよ」

「何、訳のわからないこと言って」

「自動販売機の小銭探しが、わしの生きがいなんだよ。生きがいがなくなれば、死んだも同然だよ」

「だから、あんた死んでんだよ」

「ほっといてくれ」

「ああ、ほっとくよ。でも、行進に遅れて、天国の門に入れなくても知らないからね」

「これは、天国へ行くのかい。わしは宗派が違うよ。それに、わしは、神も仏も、何もかも、信じていないぞ」

「さあ、知らないねえ」

「あんた、今、確かに天国って言ったじゃないか」

「あたしにとっては天国だけど、あんたにとっては地獄かもしれないよ。天国は信じなくてもいいけど、あんた、地獄だけは信用した方がいいみたいだね」

「なんのこっちゃ。でも、わしは今からでも、天国に行けるかなあ」

急に神妙になるA吉。

「さあ、これからの行いによるんじゃないの」

「わしに何ができるのかなあ。体はちっちゃいし、年はとっているし、技術や資格もないし。人のためになることなんて、何もできやしないよ」

A吉はおばんの胸を見る。おばんがビニール袋を振り回し、行進に近づいてくる蜂や蚊、蠅、アブを追い払っている姿が映っている。こんなおばんでも人の役に立っているのだ。じゃあ、自分には何が出来るのか。

おばんはA吉の胸を見る。A吉の人生の映像が繰り返し流れている。

「おっ」

何かひらめいたのか。おばんが叫んだ。

「あんた。手先が器用なんだね。家のドアの鍵とか金庫の鍵とか開けようとしているんじゃないの」

「喰っていくためには、仕方がないだろ。昔のことは言わないでくれよ。でも、仲間内では、指先の魔術師と崇められたこともあったけどなあ」

A吉は透明の手で透明の胸を隠そうとしながらも、少し胸を張る。

「その器用な手や指を活かせばいいんだよ」

「また、コソ泥でもやれというのかい？」

「あんたの発想は凝り固まっているねえ。その凝り固まった心をほぐすためにも、行進で疲れた人の、肩や背中、ふともも、ふくらはぎ、アキレス腱、足の裏をマッサージしてあげるんだよ。まだまだ、行進は続きそうだから、みんなから喜ばれるよ」

「俺に、できるかなあ？」

「できるよ。やればできるよ。できなければ、できるまでやるんだよ」

「わかったよ。じゃあ、やってみるよ」

「それじゃあ、あたしから」

おばんはA吉に背中を向ける。立ち尽くすA吉。

「さあ、早く、やってよ」

「何を？」

「肩だよ。肩。肩を揉むんだよ」

「誰の？」

「あたしんだよ。まずは、目の前の一步から。あたしが、この貴重な体を提供して、あんたの実験台になってあげるんだよ」

「ええ？」とまどうA吉。

「さ、早くやってよ。あたしも行進し過ぎて、肩が凝っちまっているんだよ」

A吉は、しゅしゅながら、おばんの肩を揉みだした。もちろん、相手は透明だ。実態があるようでない。揉んでいるようで、揉んでいない。手ごたえがありそうで、手ごたえはない。それにも関わらず、A吉が、おばんの肩と思われる箇所を指で動かすと、おばんは、

「ああ、気持ちいいよ。あんた、さすが筋がいいねえ」と、喜んでいる。「パブロフの肩」現象だ。

A吉は不思議に思う。死んだはずの自分が、こうして行進していること、意識があること、おばんと話をしていること、全てが不思議だ。だが、おばんの気持ちよさそうな声を聞くと、A吉も何だか嬉しくなってきた。そう、A吉は、今まで、人から誉められることなんかなかったからだ。もちろん、これまで誉められるようなこともしてこなかったけれど。

A吉は、おばんにいいように言いくるめられたと思いながらも、持ち前の器用な指先を使って、おばんの首や肩、もも、アキレス腱などをマッサージする。同時に、A吉の胸には、器用な指先を使って、金庫を開けようとしている若い頃のA吉の姿が映像として流れていた。おばんの後ろには、行列を離れた人が、自分で肩や腕、足首を回しながら、今か今かと、マッサージの順番を待っていた。

次々と霊たちが増えていく。日本一長いアーケードといわれる商店街だが、先頭のD夫が後ろを振り返っても、最後尾が見えず、商店街を突き抜けるほどの行列になっていた。行進は、最初、ただ、歩くだけであったが、誰かが歌いだした。

みんなで歌おう

みんな仲間入り

聖者の行進

町にやってきた

誰でも歌える

声を合わせよう

ほら、聖者が来た

町にやってきた

おかげで、行進にリズムが生まれた。

五 救急車ばばあ

ここに一人の老婆がいる。名はC子。年は八十歳過ぎで、一人暮らしだった。住まいは、公営住宅の一階。体はやせぎすで、最近、認知症の症状がでてきた。父や母、兄弟は既に亡くなり、甥や姪はいるが、付き合いはない。一人暮らしのため、いつも寂しさを感じている。昼間は、介護ヘルパーが食事の世話や掃除、買い物等をしてくれ、話し相手もいるため、本人は、にこにこしている。

問題は夜だ。夜になると、寂しさが一層強くなり、鼻の奥の調子が悪いと言っては、消防署に電話をする。夜中だろうが、明け方だろうが、おかまいなしだ。消防署の方も、「またか、常連さんだ。何とかしてくれ」とぼやきながらも、連絡を受けた以上は病状等の把握のため、C子の家を訪れざるを得ない。

C子の自宅まで救急車を走らせ、部屋のドアを開ける。C子は、誰かに会えたことを喜び、にこっと笑う。救急隊員は、C子に異常がなく、病院搬送の必要がないことを確認すると、担当のケアマネージャーに連絡し、C子の自宅から帰ることとなる。隊員には、安堵とどどどとした疲れが押し寄せる。もちろん、昼夜を問わず団地を救急車が訪れるため、近所の住民もいやでも、夜中に眼が覚めてしまう。

近所の主婦たちは、「今日はいい天気ねえ」の挨拶代わりに、「まあ、ホント。お騒がわせえ、あのおばあさん」と道端会議の話題に取り上げる。ついた渾名が「救急車ババア」だった。明日は我が身とも知らないで。

もちろん、C子にも若い頃はあった。昔、芸者をしていたことがあり、仏壇の横には、三味線を立て掛けている。本人の写真は飾っていないが、若い頃は、それなりの美貌だったのであろう。本人は、「パトロンはいず、身を売っていないのが、自慢だ」と言う。だから「お金がなく、ずっと、借家住まいであった」と説明する。

C子が仕事をしていた頃、毎日、夕方になると髪を結び、着物に着替え、化粧をしてバスに乗る姿は、どのような様子であっただろう。公営住宅と市内バスと芸者。粋なようで、いけない。そのC子が亡くなった。心臓が止まり、呼吸が止まり、体の機能が止まっても、C子の意識は続いている。

「救急車！救急車！」

行列の中から、甲高い声が響く。

「救急車よ！救急車よ！誰か、救急車を呼んでよ」

その叫び声も行列の騒ぎ声でかき消される。「どうしてなの。こんなにたくさんの方がいるのに、誰も、救急車を呼んでくれないの。他人に冷たいんじゃないの」

怒りに変わり出すC子。右隣の霊が

「あんた、何を言っているのよ。あんたは、もう既に、死んでいるのよ。今さら、救急車を呼んでどこに行くの。体は霊柩車に運ばれちゃまっているのよ」と諭す。

「あっ、そうか。あたし、死んだんだ」

C子はその言葉を聞くと、再び、黙ったまま行進を始める。だが、しばらくすると、「鼻が痛い、鼻の奥が痛い。誰か、誰か、救急車を呼んでよ」と叫び出す始末。

すると、今度は、左隣の霊が

「あんた、死んでいるんだよ。鼻が痛くたって、死にやしないよ、いやあ、死を心配する必要はないよ」とリアクションしてくれる。その都度、C子は、「あっ、そうか。あたし、死んでいるんだ。鼻なんか、痛くても心配しなくてもいいんだ」と納得する。だが、また、しばらくすると、

「救急車よ、救急車。救急車に乗りたいわ」とあたりかまわずわめき散らす。

そんなわがままばあさんに誰も付き合ってくれなくなった。

「いったい、どうなっているんだい。近頃の若者は。年寄りが困っているのに、誰も助けてくれないのかい」と、自分が人を困らせていることはわかっていない。行進のスピードに合わせずとろとろと歩く。早足の男の左肩がばあさんの右肩の後ろに当たる。いや、正確には、透き通っただけだが、C子はまだ生きていた時の感触が忘れられない。当たったと言う雰囲気だけで、C子は1回転する。再び、別の男の左肩がばあさんの右肩の後ろを透き通る。

「あーれー」

C子は、再び、一回転する。ばあさんゴマの始まりだ。行進に飽きていた霊たちは、唯一の娯楽を見つけたかのように、いや、魔除けの儀式のように、わざとばあさんの肩にぶつかっていく。

例えば、想像してみよう。小さな川に石を投げ込む。石は水の勢いに負け、流されるか、自分の立ち位置はここだと決め、必死で抵抗するか、のどちらかだろう。だが、C子の場合、そのまん中だ。流されるわけではない。何とか、踏ん張れる。だが、回転は続ける。

行進に左肩を押された雰囲気、右に一回転。再び、後ろからの死霊に左肩を押された雰囲気、一回転。回転しながらも、行進を続けるC子。なんと、いじらしい姿だ。

「救急車。救急車を呼んでよ」の声だけが、行進の渦の中に消える。

C子のほっぺには、これまでの人生が映像として流れている。くるくる回るC子のほっぺを眺めたパイナップル髪の若い男の霊。何を思ったか、列を離れ、近くの楽器屋に入っていった。しばらくすると、右手に三味線、左手にベースを持っている。もちろん、実物じゃない。三味線とベースの霊だ。

息を切らしながら走り、C子のいる列に入り込みむと、「ほら、ばあさん。三味線だ」と手渡す。自分はベースを肩から吊し、ピックを指で掴むと、弾き始めた。ダダダン、ダダダン。ダダダン、ダダダン。

三味線にほおずりをしていたC子。ベースの音を聞くと、「あたしが、リードしてやるよ。よーお」と叫び、三味線を掴むと、昔取った杵束ならぬバチで、ベベン、ベンベン。ベベン、ベンと弦を弾く。ずっこける若い男。パイナップルの髪を逆立てながら、

「まあ、いいか」と呟く、三味線のリズムにベースを合わせようとする。

こうしてC子とパイナップル頭の若者は、

みんなで歌おう
みんな仲間入り
聖者の行進
町にやってきた

誰でも歌える
声を合わせよう
ほら、聖者が来た
町にやってきた

の歌声に合わせて、伴奏しながら、歩き始めた。年の差を超えた即興のバンドだ。なんて、ほほえましい姿だ。隊列は乱れ、弾き飛ばされる者もいたが、三味線ばあさんとベースあんちゃんの演奏のおかげで、だいたい（そう、何でも、だいたいでいいんだ。完璧こそが、人を抑圧し、反乱を起こさせる）秩序よく、行進していくのであった。もちろん、歌声の音程も楽器の演奏もだいたいであった。

行進は、歌声に三味線、ベースが加わり、次第に、ハーモニカ、カスタネット、リコーダーなど、様々な楽器も加わった。霊たちの中にもプロのミュージシャンたちがいたのだ。彼ら彼女らは、自ら進んで、演奏することを申し出た。おかげで、行進にリズムが生まれた。リズムに合わせて、行進者の頭が上下する。屋根に降った雨のひとしづくが、雨水炉を通り、側溝を流れ、小川に辿り着き、大河に流れ込む。まさに、霊たちは、これと同じだ。行進は、商店街を抜け、中央通りに出た。

ポンチョを着たまま、先頭を歩くD夫。

「すごい列だな」

後ろを振り向くと、長蛇の列。それも一列、二列じゃない。先頭辺りは、二列から三列だが、後ろに行くに従い、広がっていく。先が尖った二等辺三角形だが、底辺は見えない。最後尾が見えたかと思うと、また、新たな霊たちが列に加わり、底辺が後ろにどんどん下がっていく。永久に伸び続け、未来永劫広がる底辺なのだ。

六 骨壺ばあさん

「ううん。なんじゃいな。やかましいなあ」

B本は、目を覚ました。目を覚ますと同時に、体から魂が抜けた。

「あれれれれ」

体が軽くなった。ふと、後ろを振り返ると病院の玄関の自動ドアの前に誰かが座っている。

「誰だろう。知らない人だ」

この体こそが、B本のものであるが、じわりじわりと進行し、最高潮に達した認知症は、自分の肉体さえも忘れ去っていた。ただ、生きていた時には足を引きずっていたはずなのに、今は体が軽ろやかだ。地に足がついていないということはわかっていた。それと、右手に持っているスーパーのビニール袋。この中には、B本の母親の位牌と骨壺が入っている。B本はいくら認知が進行しても、このビニール袋だけは手放すことはなかった。自分の命よりも大事な、甘美な思い出が詰まった袋なのだ。この袋のお陰で、B本はこれまで生きてこられたのだった。

ここでB本のことを紹介しておこう。

B本は、六十歳過ぎの身よりのない女性だだった。死んでからは年齢不詳だ。いや、年齢が止まったままだ。これまで母と二人暮らしで生活してきた。その母も三十年前に亡くなり、母の葬式には近親者が参列してくれたが、それ以来、親戚とのつきあいは途絶え、まるっきりのひとりぼっちになった。だが、B本は寂しくなかった。B本の側にはいつも母がいたからだ。B本は、雨の日も、風の日も、雪の日も、晴れの日も、仕事に行く日も、休みの日も、毎朝、母の仏壇に手を合わせた。

習慣とは恐ろしいものだ。いや、いいことだ。B本に認知の兆しがあらわれ始めると、仏壇を拝むことはなくなったが、自衛手段としてか、位牌と骨壺をスーパーの袋に入れて持ち歩くようになった。もう、拝む必要はない。いつも一緒なのだ。

より一層痴呆が進行すると、自宅でじっとしていられなくなった。そして、一度、出奔すると自宅に戻れなくなり、母（骨壺&位牌）とともに、病院、銀行、喫茶、市役所、図書館、スーパーなどを訪れては、「ここは、天国の門ですか。是非、天国に入れてください」と同じ言葉を繰り返ししゃべり続け、長時間居座った。

最初は、何時間も話を聞くなど、丁寧に対応していた職員たちも、何回も同じことが続くと、困り果て、保健所や警察などにも相談したが、B本が、「天国の門に入りたいんです」と繰り返すだけで、他人に危害を加えたり、自傷行為をすることもなかった。なすすべがなかった。B本が訪れた施設側では、ただ、嵐が通り過ぎ去るのを待つしかなかった。

B本は、誰も自分の願い（つまり、天国の門に入ることを）を叶えてくれないので、とうとう、手に持った骨壺と位牌を振り回すようになった。それ以来、人々はB本を憐れみと恐怖心から「骨壺ばあさん」と呼ぶようになった。通りすがりの人が、「お母さんの入った骨壺を振り回したら、お母さんが泣くよ」と諭しても、「いや。きっと、お母さんは許してくれるはずだ」と自己弁護に終始するだけであった。

B本が住んでいる借家の大家さんを始め、民生委員、市役所などの関係者が心配し、病院や施設入所の手続きを凶ろうとしていたが、最後の結末は、哀しいことに、自分が天国の門であると信じて疑わない病院の玄関前で動かなくなっていたわけだ。

B本が今まさに、生死の境目の瞬間、霊たちが中央通りを行進していた。その数、数百、数千、数万だ。一人暮らしが長かったB本だけに、人が大勢いて賑やかだと、つい近寄ってみたくなる。だが、B本の体は固まって動かない。B本の心は、行進に加わろうか、加わらないでおこうか、逡巡していた。しかし、根っからのお祭り好きの性格は抜け切れず、ふっと魂が抜けて、行進に加わることになった。

B本は生きていた時から、コーヒーが三度の飯より大好きで、朝はモーニング、昼は、午後二時までやっているモーニングを食べ、三時のおやつには自動販売機の缶コーヒーを、夜は、コンビニで弁当と一緒にカップコーヒーを飲んでいた。

B本は行進に加わったものの、生きていた時の習慣が抜けられないのか、行進からすぐに離れて、喫茶に入ってしまった。

「B本さん。あんた、何しよんな。こんなことで、油売っとらんで、さっさと、行進に戻らなあかんで」

行進中に知り合ったばかりの、ちっちゃなばあさんがB本の座っている喫茶店の席の横に立った。このばあちゃんは、生きていた時、他人を困らすようなことはなかった。どちらかと言えば、他人との関わりを避け、ひっそりと暮らしてきた。

「油や売っとらんで。コーヒー飲んみよるだけや。あとひと口やから、待っといてえなあ」

「あたしは知らんで。せっかく、天国からお迎えが来たのに。その行進に乗らんかったら、おいできぼりや。このまま、中途半端に、この世界におるんかいなあ」

「ほなけん、ちょっと待ってたあ、と言うてるやろ。もったいないことに、コーヒが残っとんのや」

B本は、生きていた客が飲み残したコーヒを、カップを手で持てないため、頭を下げ口で啜ろうとする。

「あんた、器用やなあ」

「こうでもせんかったら、飲まれへんのや」

「でも、そこまでして飲むかいな。誰かわからん客の飲み残しやろ」

「死んどんやから、お腹があたることはないやろ。もし、服中毒死したら、生き返るんと違うんかいな」

「あんた、あれだけ、現世で迷惑掛け取って、まだ生き返りたいんかいな」

「なんで、あんたがそんなこと知っとんかいな」

「ほら、あんたのお腹にあんたが映っとるで」

B本は思わず自分の腹をさわる。何もない。喫茶店のガラス窓にお腹を写す。はっきりとわからない。目がぼやけているせいだ。老眼か、緑内障か、白内障のせいだろう。死ぬ前に、眼科に行って、治療しておくんだと今さらながら後悔する。

「なんでや。なんで、あたしの腹にあたしが映っとんのか。テレビでも入っとんのか？」

「テレビやないで。その証拠に、チャンネルがないやろ」

「ほんまや。あんたのお腹にもあんたが映っとる。チャンネルもないのに、勝手に、映像が流れとる。これ、NHKかいな。NHKやっても、受信料は払わへんで」

「心配せんでもNHKではないで。朝の連続テレビ小説もニュースも、大河ドラマも流れとらんやろ」

「ほんまや。何か訳のわからん、小汚い、小娘やおばはん、ばばあが次から次へと映っとるわ。それに、みんなおんなじ顔しとるで。これ何の番組や。もっとましな番組ないんかいな。新聞の番組欄持ってきてえたあ」

「そんなもんあるかいな。それにこれは立派な番組や。ドキュメンタリーやで」

「ドキュメンタリーでも、もっと、ましな主人公を取材せんのかいな」

「ほっといてえたあ。あんたが見てんのは、あたしのお腹や。あ・た・しのこれまでの人生が映とんのか」

「どうりで、上品で、きれいな淑女が映っとると思うとったんや」

「今さら、遅いわ」

「それなら、当然、あたしのお腹にも、上品で、きれいな淑女の人生が映像として流れているのでしょうか。そこの、クソババ。教えていただけませんか」

「なんで、あんたが、上品で、きれいな淑女で、あたしが、うんこばばあなんや。それに、さっき、きれいな淑女って言うたんとちゃうんか」

「うんこばばあ、ではございません、クソババアでございます。それに、状況の変化に合わせて、対応も異なるものでございます」

「どちらにせよ、一緒や。それに、なんで、急に、丁寧語になってんのか。全然、あんたの雰囲気は噛み合っていないで」

「やっぱりそうか。わても、なんや、あごがはずれそうでいかんのか」

骨壺ばあさんは口から入れ歯を取り出すと、客が飲み残し、片付けられていないグラスの水で簡単に洗うと、再び、口の中に入れた。

「うん。これや。これや。ぴったしや。歯も磨かんでええわ。ほんで、話を続けてえなあ」

「なんや、汚いなあ。まあ、ええわ」

うんこばあば、いや、クソババア、いや、ちっちゃなばああさんは、話を始めた。

「わたしにもわからんけど、自分のこれまでの生きてきた人生の映像が走馬灯のように映るらしいんや」

「なんや、その走馬灯って。競馬のJRAの宣伝塔かいな」

「いや。あたしも知らんのか。辞書に、走馬灯って書いてあるから、使こうてみただけや」

「なんや。知らんくせに、人に言うんかいな」

「知らんからこそ言えるんや。知っとたら言えるわけないやろ」

「そりゃそうや」

「なんや。いやに素直なやあ」

「何でも、素直が一番や。死んで、初めて知ったわ。生きとるうちに、言うこと聞いて施設に入

とったら、こんなことにならんかったんや」

「ほら、見てみい。あんたの腹に、あんたが骨壺が入ったビニール袋を振り回し取る姿が映ってるで」

「見てみい言うても、見えんがな。何か記憶にあるわ。ひょとしてこれか」

B本はぶら下げていたビニール袋を前に差し出した。

「そうや、そうや。それや、なんや、死んでからも持っとんかいな」

「これは、あたしのお母さんの骨壺や位牌が入っとんのや。それを生きとった時のあたしが振り回してんのかいな。なんて、ひどいことを。これはビニール袋やのうて、神袋やで」

B本は、気を静めるため、コーヒーを飲む。

ずずずずずず。音はするけれど、コーヒーは飲めない。B本は力を込めて飲もうとしたせいか、顔が赤らむ。

「そんな飲み方したら、他のお客さんが驚くで」

「あんたが、あたしを驚かすからや。それに、あたしらは死んどんのや。生きとる奴らには姿は見えんへんやろし、音は聞こえへんやろ」

B本の目の前には生きている客が座っている。さっきから、自分一人なのに、何故か、同じテーブルから声が聞こえて来る気がしてならない。足を右に組んだり、左に組んだり、読み物を新聞から雑誌に取り変えたりと、あれこれと試みるが、やはり、耳鳴りもどきは続く。うなされているんだ。

その様子を見ていたマスターがウェイトレスに目で合図をする。（いやに挙動不審な客だ。早く出ていくように動いてくれ）

客が落ち着かないのは、B本のせいだが、生きている人には、霊は見えない。ただし、感受性が高い人間は、何かしらの影響をいやおうなく受けてしまう。もちろん、好きで、B本の影響を受けている訳ではない。たまたま、席が空いていて、そこに、B本がガラス越しに入って来たせいだ。

店長の命令を受け、ウェイトレスが水差しを持って、B本の向かいに座っている客に近づいた。

「あの一。おひやお入れしましょうか？」

コップの水は満杯だ。客は黙ったまま。

「うるさいなあ、あんたは。ちょっと待ってくれと言うとるやろ」

B本は、客の代わりに立ち上がり、骨壺の入ったスーパーのビニール袋を店内で振り回し始めた。ちっちゃなばあさんは、慌てて、B本の前に立つ。

「ちょっと待てえなあ。現世の人に迷惑かけたらあかんがな。死霊に口なしの譬えもあるやろ。生きとる人の言葉に、死んどる人がいちいち口応えしたらあかんのや。それに、その袋の中に、あんたのお母さんの骨壺と位牌が入っとんのとちゃうか」

それでも、B本は、「お母さんが許してくれる。お母さんが許してくれる」と叫びながら、引き続き、袋を振り回す。ビニール袋は空気中に八の字を描く。それを合い図と見たのか、ミツバチの霊が喫茶店に飛び込んで来た。

「ハチや、ハチや」

B本はハチが大の苦手だった。まさか、死んでからも、ハチに出会うとは思わなかった。

「助けて。助けて。かあさん、助けて」

引き続き、神袋、いやビニール袋を振り回す。慌てたのは、B本だけでない。喫茶店のお客たちも、ハチの霊が店の中で飛び回るため、刺される心配はないものの、何だか気持ちが落ち着かない。骨壺ばあさんは喫茶店の中を走り回る。

不思議なことに、相手が逃げれば、追いかけたくなるのが、人、いや、虫の常。面白がって、ハチがB本を追いかけ回す。

「きゃー、助けて」

B本とハチが、狭い喫茶店の、カウンターの中、テーブルの上、天井、窓ガラス、トイレなどをドタバタ、バタバタと天地無用で猛レースを繰り広げる。B本が逃げても、逃げても追い掛けるハチ。B本が床に転んだ。うつ伏せから仰向けにひっくり返る。そこに、ハチが。

「もう、だめだ」

B本は目をつぶったまま、手に持っていたビニール袋を滅茶苦茶に振り回した。B本の思わぬ反撃に、ハチが目の前でホバリングする。さすが、ハチドリの師匠。空中を勢いよく飛んでいても、急ブレーキはお手の物だ。だが、それが裏目に出た。空中に止まったハチにビニール袋が直撃。袋はハチの体を通り抜けたものの、B本の覇気の力なのか、パブロフの袋のせいなのか、ハチは喫茶店から遙か彼方に吹っ飛んでいった。

窮鼠猫を噛む、ならぬ、窮婆蜂を迎撃する。ここに、新たな諺、新たな神話が、いやビニール袋話が生まれた。素ん晴らしいことだ。

倒れたままのB本。

「もう、大丈夫だよ」

ちっちなばあさんが声を掛ける。

「ハチは、ハチは」とうわごとのように繰り返すB本。

「ハチはいないよ。あんたがハチを追い返したんだよ」

「ホント？」

「ホントだよ」

B本は立ち上がりながら、

「あたしは、元々、ハチなんか怖くないんだよ。ちょっと、逃げるふりをして、相手に油断させたんだよ。ざまあみろ」

「そうなの」

ちっちなばあさんはクスクス笑う。

「それなら、元の行列に戻って、みんなをハチから守ってあげたらいいんじゃないの」

「いいこと言うね」

B本は自分の力で立ち上がると、「ハチ、ハチ、ハチはどこ。あたしにはお母さんがついてるんだよ」と叫びながら、喫茶点から飛び出して行った。後を追うちっちなばあさん。

「ちょっと、待ってえなあ。コーヒー代は払わなあかんで」

二人は、霊の行進に飲み込まれた。今も、B本は「お母さん許してな。みんなのためや」と祈りながら、ビニール袋を八の字に振り回しながら、行進に近づいてくるハチやあぶ、ユスリカ、ヤブカ、ゴキブリ、ムカデなど、虫の霊から、みんなを守っている。神の思し召しのままに。

七 果てしなき道へ

「俺、大丈夫かなあ」

D夫は不安そうな顔で呟く。

「だいじょうぶです」「だいじょうぶだわ」

両脇の二人の男の子と女の子が、何の根拠もなく力強く答える。

「リーダーは、志が高ければ、それでいいんです」

「俺、志はないけれど・・・」

「いえ、前を向いているじゃないですか」「そう、前に進んでいるわ」

「後ろのみんなは不安で、寂しいんです」「そう、寂しいんです」

「あなたが前に進むことで、みんなが元気になるんです」「そう、元気になるんです」

「前に進むことが大事なんです」「大事なんです」

二人に励まされ、D夫はなんとなく納得する。

「前に進むのはいいんだけど、この道はどこがゴールかなあ」

D夫は、どこまでも果てしなく続く道に、ゴールを求めて、遠い目を馳せた。

八 最後の審判

行進中の霊同士が話している。

「おいらたち、天国やあの世、浄土に行ったらどうなるの」

「死んじゃったことにはならないね」

「そりゃあ、よかった」

「天国では生き返ると言うこと？」

「死だって、死を生きているよ」

「そうなんだ。生を謳歌するように、死も謳歌できるんだ」

「やった！」

「天国でも、行進できるの？」

「そりゃあ、もちろんだよ。生きている時も行進していたんだよ。もちろん、みんな、思い思いの人生を送るために、列を離れたり、くっついたりしていたけれど」

「ああ、そうか。そうだったんだ。ようやく戻って来たんだ」

「おかえりなさい」

遙か彼方の行進の先頭は、今まさに、門に入ろうとしていた。